

思想と科学の間で
学術研究で人間と社会を読み解く

ゴシップの力 ——「噂話」が心と社会を作り上げた *The Power of Gossiping*

京都大学大学院助教
川端祐一郎
Kawabata Yūichirō

人間の雑談の三分の二は「他人の噂」

人が安定した関係を構築できる知人の数はだいたい一五〇人前後であるという、いわゆる「ダンバー数」を提唱したことで知られるイギリスの人類学者ロビン・ダンバーは、一九九七年に同僚たちと書いた『人間の会話行動』という論文で、大学の食堂、街のバー、電車内など、公共空間における人々のインフォーマルな雑談のトピックに関する調査結果を報告している。計一〇二名の発話例（一人あたり平均発話時間は約十一分）を分析したこの調査によると、人々の会話時間の六〇％から七〇％が、個人的な人間関係、自分や知り合いが登場するエピソード、今後誰かと会う予定などの話題に費やされていた。ダンバーはこの種の問題を「ソーシヤル・トピック」と呼んだが、後の研究では「広い意味での噂話（ゴシップ）」と言い換えている。ちなみにそれ

以外では、たとえば仕事や勉強に関するトピックが会話時間全体の数％から二〇％弱を占めていた。

ダンバーらの研究に先立って、社会心理学者のニコラス・エムラーは一九九二年に、「人々の雑談の約七〇％はゴシップだ」という調査結果を報告していた。また人類学者のジョン・ハビランドも一九七七年の論文で、メキシコでの調査結果から、雑談のトピックの七八％が社会的関係に関するものであると指摘していた。日常会話の内容を広く分析した研究例は少なく、これらの研究結果も曖昧にしか解釈できないところがあるのだが、インフォーマルな雑談の中で最大の割合を占めるのがゴシップだという指摘については、「言われてみれば確かに」と得心する人が多いのではないだろうか。

注意が必要なのは、「ゴシップ」というと芸能人の不倫ス

キャンダルのようにネガティブなものを想像しがちであるものの、ここではより一般的な意味で「他人の噂話」を指しているということだ。英語の「ゴシップ」はもともと「親しい知り合い」を意味する言葉で、それが「くだけた雑談」や「噂話」の意に転じたとされる。近年の社会科学者たちによるゴシップ研究においては概ね、「その場にはいない第三者に関する、インフォーマルな会話」というほどの定義で用いられている。

最近の研究例を挙げると、心理学者のメーガン・ロビンズらが今年発表した論文では、四六七名の学生に自動録音機を持たせて、数日間にわたって記録した会話の分析結果が報告されている。それによると、平均で一日あたり約五十二分間がゴシップに費やされていたが、そのうち四分の三は、ポジティブでもネガティブでもない「ニュートラル」な内容の噂話であった。（なお、約五十二分間という数値は全会話時間の約一四％に相当する。先ほどの六〇〜七〇％という数字は、全会話ではなくインフォーマルな雑談に占める割合であったため、それに比べると小さな値となっている。）

ゴシップが社会を作り上げた

ところで、我々は何故これほどまでにゴシップを好むのだろうか？

ダンバーをはじめゴシップを研究対象としている社会学者たちの一部は、ゴシップを語ったり聴いたりしたくなるのは我々の本能的なレベルの傾向であって、そこには進化的な理由があるはずだと主張している。

ダンバーらが論じているのは、言語に基礎を置く人間のコミュニケーション能力が発達してゆく過程で、ゴシップの共有こそが中核的な役割を果たしてきたのではないかということである。そして、人間の高度な知能や複雑な構造を持った社会は、ゴシップの交換を通じて他者を理解する能力を洗練させた結果として形成されたものではないか、というのである。実証的にも理論的にも疑問が無くはないのだが、興味深い仮説ではある。

人類は進化の歴史のうち大半の期間を、小規模で閉鎖的な、変化の少ないコミュニティに所属して暮らしてきた。ほぼ全てのメンバーが顔見知りであるような小集団の中で、人々は生活のために様々な協力をを行い、同時に生き残りを賭けた競争を繰り返してきた。一方では仲間とのあいだに親密な関係を結びつつ、他方ではライバルを出し抜かなければならない。そのような世渡りの技術の中心にあったのが、ゴシップを通じて自分や他人の「評判」を操作することだったのではないかとダンバーらは言う。

ゴシップ研究者がしばしば指摘するのは、類人猿は「グ

ルーミング」毛づくろい)によって信頼関係を築いているの

に対し、人間はその場に居ない第三者に関するゴシップを巧みに交換することによって、社会的な絆を強化しているのではないかということである。ゴシップの共有が人間同士の信頼関係を強化し得るのは、それが受け手にとって有用な情報だからだ。「先日、あのひとあの人の間でこんなトラブルが起きた」彼は昨日、こんなことを言っていた」といったエピソードは、当の第三者が信用できる人物なのかどうかを判断したり、今後どのような行動に出るかを予想したりする際に役に立つのである。

またゴシップは、他人の評判を貶める目的で用いられることも少なくない。ダンバーらとはとりわけ、互酬性のルールに従わない「フリーライダー」行為、つまり共同体に自ら貢献することなく利益だけを受け取るといった裏切りを、直接的な暴力を用いずに抑制する社会的な手段として、ゴシップが機能してきたのではないかと論じている。

人間の精神や社会の構造がこれだけ複雑なものに発達した経緯を、ゴシップの有用性だけで説明することはもちろんできない。しかしゴシップを通じて過去の他人の行動を理解し、伝達し、さらには将来の行動を予測するというコミュニケーションの実践が、人間が社会的知性や社会秩序の原形を作り上げる上で大いに役立ったと考えるのは、不

自然な発想とは言えないだろう。

ゴシップと「物語モード」

ゴシップというのは、話し手による主観とバイアスがかなりの程度織り込まれた情報である。それでも小規模な共同体においてであれば、ゴシップと現実の乖離もさほど大きなものとはならないし、ゴシップの共有が社会関係のマネジメントに役立つ範囲も広いであろう。しかし近代社会における人間関係は大規模かつ流動的なもので、我々は日常的に多数の「顔見知りではない他人」と関わりを持つ必要がある。このような社会では、人間関係の全体像を把握したり管理したりする上で、客観的なデータや中立的な制度といったものが以前に比べて重要な役割を果たすようになる。そこでなおゴシップの流儀に強く依存しようとすれば、たとえば現実から遊離した「陰謀論」に取り憑かれ、認識や実践が大きく歪んだものになってしまうかも知れない。

しかし、我々がゴシップにとらわれることをやめられるのかというと、そうは考えにくい。というのも、ゴシップ的な情報への関心是我々の本能に近いレベルに根を下ろしている、世界の理解の仕方そのものを規定している可能性があるからである。

心理学者のジェローム・ブルーナーは、人間の認知能力というものは大きく「論理科学モード」と「物語モード」に分けられるのだと主張した。「論理科学モード」によって我々は、物事の背後にある、客観的で普遍的な法則について考察することができる。一方で「物語モード」の思考は、我々の生きている世界の迫真性、つまり「リアリティ」や「もつともらしさ」に関わっていて、もつと個別的で具体的なものだ。

社会的な関係にせよ自然界の出来事にせよ、それが生き生きとしたリアルな現実として人間に感得されるためには、物語的な言葉によって表現され解釈される必要があるというのが、ブルーナーの説である。数値や法則ではなく、ストーリー性を持ったエピソードこそが、世界の「本物らしさ」を支えているというわけだ。

人類が物語モードの思考を持つようになった経緯はよく分かっていない。しかし、他人の噂話をエピソード形式で共有しあう「ゴシップ」を、太古の昔から人間が社会関係の構築に利用していて、それによって言語能力を鍛え上げてきたのだとするなら、ゴシップが物語型の思考モードを

形作る契機の一つになった可能性はある。

そう理解すると、ゴシップというものは単なる処世のため手段ではなく、我々の生きている「世界」——物理的な空間としてではなく、人間的な意味を持ったものとして我々が経験している世界——を構成する主要な材料の一つであり、あるいは骨組みですらあると言うべきかも知れない。品の悪いゴシップも少なくないのは事実だが、ゴシップというものは本質的には、他者を理解しその心理や行動を想像しようとする言葉のやり取りにほかならない。そしてそうしたやり取りの中にこそ、我々の生き抜くべき世界があるのではないだろうか。

〈主な参考文献〉

- Dunbar, R.L. Marriott, A. & Duncan, N.D.(1997). Human conversational behavior. *Human Nature*, 8(3), pp.231-246.
- Dunbar, R.L.(2004). Gossip in evolutionary perspective. *Review of general psychology*, 8(2), pp.100-110.
- Robbins, M.L. & Karan, A.(2019). Who Gossips and How in Everyday Life?. *Social Psychological and Personality Science*, online.
- McAndrew, F.T.(2008). Can Gossip Be Good?. *Scientific American Mind*, October/November 2008, pp.26-33.